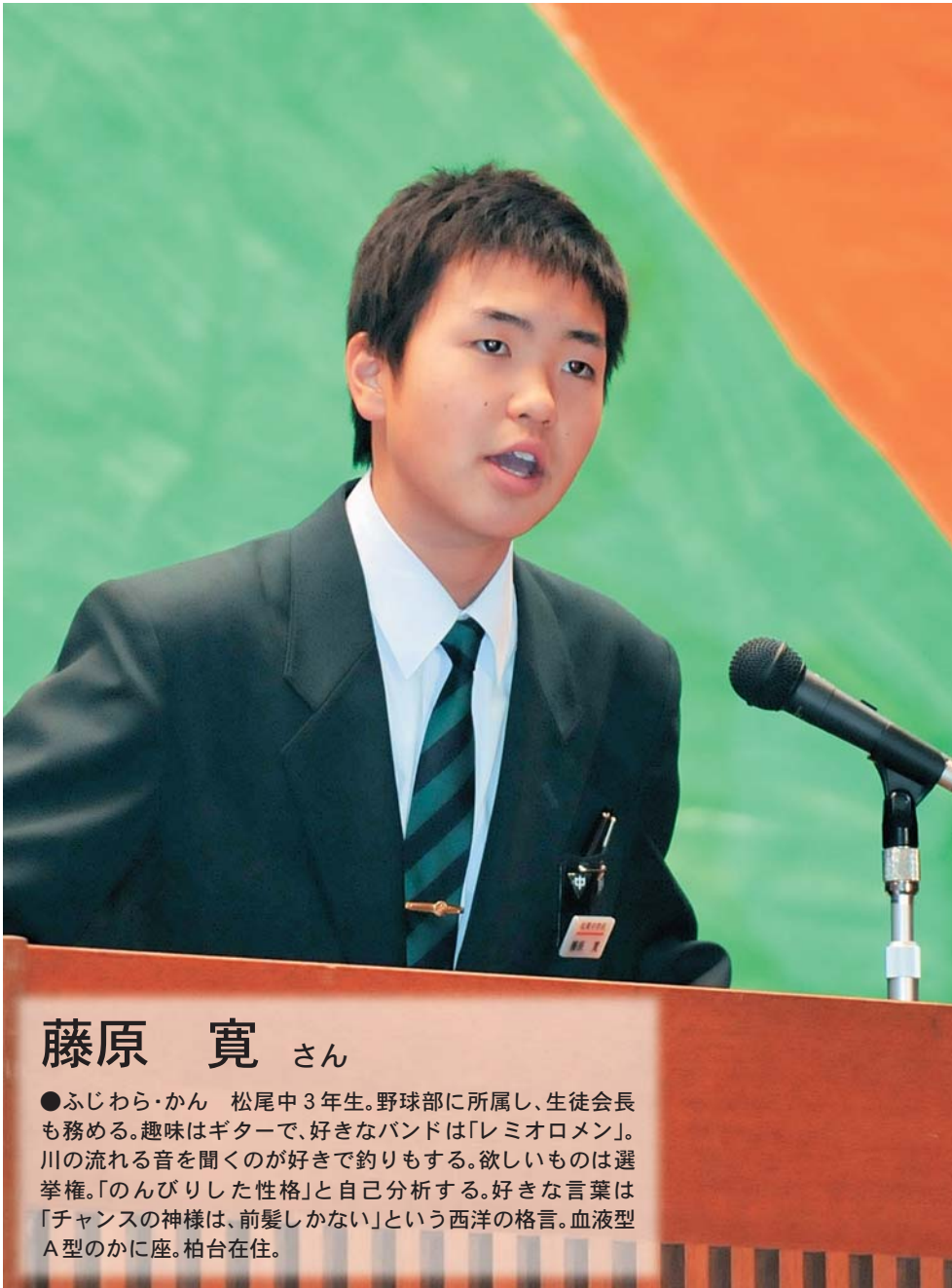


Zoom Up

人

僕の発表を通して
同じように悩む人たちを
元気付けられたらと思っ
ています



藤原 寛 さん

●ふじわら・かん 松尾中3年生。野球部に所属し、生徒会長も務める。趣味はギターで、好きなバンドは「レミオロメン」。川の流れる音を聞くのが好きで釣りもする。欲しいものは選挙権。「のんびりした性格」と自己分析する。好きな言葉は「チャンスの神様は、前髪しかない」という西洋の格言。血液型A型のかに座。柏台在住。



吃きつ

音。これは、わたしの主張北岩手地区大会、同岩手県大会で最優秀賞を受賞し、北海道・東北ブロック選考会で全国代表に選ばれた藤原寛さんの主張テーマであり、彼が子どもの頃から最もつらいと感じていたことだ。

「吃音」とは、発音障害の一種で、発音のときに、第1音が容易に出ない、繰り返す、引き伸ばすなど円滑に話せない状態のことを指す。寛さんは、小学校に入学したころから吃音が気になり始め、「一番つらかったのは、つかえて話すところを友達にまねされたこと」と当時を振り返る。人前で話をするのが苦手な自分が児童会長を務め、繰り返し練習することで自信を付けて克服した体験を書いた主張原稿は、「驚くほどうすらすらと書けました」という。今までの

思いが、胸の中にあつた言葉があふれてきたのだろう。発表に關しては、原稿を暗記したくらいで、特に練習しなかったという寛さん。暗記も自分で書いた文章なので難しくなく「まさか最優秀賞を取るなんて」というのが北岩手地区大会の結果を聞いたときの本音だ。

寛さんは、県大会でも最優秀賞を狙おうといった意気込みはなく、「まさかの受賞でした」と語る。気が負けない緊張はほとんどしなかったという。会場を見渡しなが、観客の目を見て話すことを心掛けていた寛さんは、「審査員や観客の人たちが、自分の主張を聞いてうなずいたりする、その反応がうれしかった」と発表したときの感想を聞かせてくれた。

北海道・東北ブロック選考会の審査を通過した寛さんは、11月に東京で開かれる少年の主張全国大会・わたしの主張2008に参加する。「欲を持たずに、今までと同じように発表したい」と全国から12人しか参加できないこの大会への意気込みを語ってくれた。自分が輝ける場所という発表の舞台で寛さんは再び主張する、吃音の壁を越えて――。